

富山大学教育学部附属教育研究実践総合センター

Center News

Center for Educational Research and Practice,
School of Education, University of Toyama

第45号

(2025年3月15日発行)



客員教授と内地留学生のゼミ

センターニュース第45号 目次

02	巻頭言	学部長 徳橋 曜
03	挨拶	センター長 高橋 満彦
04	報告	客員教授 久保 雅則 客員教授 宝田 幸嗣
06	学園通信	附属幼稚園／附属小学校／附属中学校／附属特別支援学校
08	活動報告	学習環境研究部門 教育臨床研究部門 教育工学研究部門 環境教育部門
10	報告	内地留学を経験して
11	報告	第105回国立大学教育実践研究関連センター協議会 第106回国立大学教育実践研究関連センター協議会
12	業務報告	センター日誌 編集後記

教員養成の未来へ

教育学部長 徳 橋 曜

令和6年度も終わろうとしています。センターの先生方には本年度もさまざまな面で学部・研究に貢献していただき、ありがとうございました。

さて、本年度も教員採用をめぐる、受験者数減少の傾向や大量の辞退者が出た県もあることなどが折に触れて報道されました。本年度の富山県の教員採用試験の倍率は1.9倍であり、昨年度よりも倍率が低下して2倍を下回ったということから、富山県教育委員会も危機感を募らせています。学校現場の仕事は大変だという認識は社会全体にも学生にも定着しています。2年生を対象としている教育学部の授業「富山県の教育実践」では、ゲストスピーカーである教職大学院生の現職教員達に対して、残業はどのくらいか、「ブラック」だと言われるが特に何が大変なのか、といった質問も学生から出ます（もちろんこうした踏み込んだ質問はゲストスピーカーの承諾の上です）。だから教師にはならない、という短絡的な結論は幸いにもないようですが、自分が目指す職業の前途が「ブラック」だと言われていれば、学生としても気にしないわけにはいかないでしょう。

実際に何がどこまで「ブラック」なのかを簡単には言えませんが、現在のそしてこれからの教育現場が種々の課題を抱えていることは間違いありません。少し考えただけでもITC教育（機器やソフトの使い方、プログラミングの技能等と共に、モラルやセキュリティの側面での教育が重要でしょう）やデジタル教科書の扱い、小学校での英語教育、発達に問題を抱えた子どもやギフテッドと呼ばれる子どもへの対応、そうした子どもを含む学級運営のあり方、地域連携やコミュニティスクールの位置付けなど、従来の方法論では対応しきれないような課題が挙げられます。教師自身の労働環境・働き方の課題もあります。そして外国語を母語とする子ども達の教育も、これからの重要な課題になるでしょう。文科省によれば、公立学校における日本語指導が必要な児童生徒の数はこの10年で約37,000人から約69,000人に増えており、今後も増加すると見られています。教職課程コアカリキュラムにおける「特別な支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」のうちには「障害はないが特別的教育的ニーズのある幼児、児童及び生徒の把握や支援」があり、日本語教育の必要な子どもへの対応はここに含まれます。富山県内では射水市や高岡市でこうした子どもへの対応が先行しており、一昨年から富山県教委も対応を始めました。しかし、現実の対応はまだ十分とは言えない部分もあるようです。一方、本年度から国家資格としての日本語教員試験が実施されましたが、これはあくまでも日本語学校で外国人に日本語を教える教師の資格であって、公立学校等での教育を想定してはいません。今後の教員採用に当たって「国内での外国人に対する日本語教育に関する学習歴・資格や指導に従事した経験」を考慮するように、文科省から通知も出ていますが、日本語教員としてのスキルと学校教員、特に小学校教員としてのスキル・資格は別です。

こうした課題に一人で立ち向かえるスーパー教師がいるわけありませんが、学生にこれらの課題を考えさせ、課題に対応するスキルを少しでも身に付けさせることは、教員養成学部の役割の一つでしょう。その上で教師という職業の良さややりがいを学生達に伝え、教員になりたいという意志を強めていけたらと思います。そして、その土台となる教育課題の研究や教育実践については、教育研究実践総合センターに大いに期待します。今後ともどうぞよろしくお願いします。

実践センターの使命

教育研究実践総合センター長 高橋満彦

新たにセンター長に就任しました高橋満彦です。環境教育部門としてセンターに名を連ねていたのですが、センター長としては初めましてであります。

環境教育部門はセンターに後年加わったものであることもあり、不肖私、センター長でありながら、いまだに実践センターの全貌を熟知しているとは言えませぬ。元来、実践センターというものの使命は明白自明とは言えぬものであります。センター規則には「センターは、教育の諸課題に係る研究及び実践を、学際的観点から総合的に行うことを目的とする」とあります。沿革的に考察すると、ICT教育などの教育工学、あるいは教育心理学、臨床心理学に関する取組が中心となった時期もあったようです。当センターも教育学部、人間発達科学部、また教育学部と星霜を経て、今後のレゾンドートルはどこに求めればよいのでしょうか。

そのような問いを携えて、先日東京学芸大学で開催されたセンター協議会総会に出席しました。その中で、やはり各センターの沿革は似たり寄ったりでしたが、教育実習や学生の学校現場への派遣の折衝を担うセンターや、非常勤の実務家教員の対応をするセンターが目立ちました。また、全学の教職支援組織に改組されたセンターもありました。思うに学部を上げて教員の卵を養成しようとする本学においては、教育実習や学生の学校派遣は、従来どおり、センターに止まらず全学部的な取組であるべきです。

さすれば当センターの使命はいずこに。教員養成教育自体は全学部的業務となる中で、センターの使命は、学部のルーティン業務では手が届きにくい実践教育的研究の推進ではないでしょうか。その過程では附属学校園との連携も重要です。研究自体は学部構成員全員の業務だが、各員専攻の研究だけでは捉えきれない教育実践に関する実学的研究を推進すべきでありましょう。そして、実学的な共同研究を推進するために、学部、教職大学院、附属学校園の各員の参画をより一層推進するとともに、内地留学生をはじめ、部外の教員諸賢との連携を強化する必要があります。

センター協議会では金沢大学をはじめ、理由は様々だろうが、退会する大学が目につきましたが、小職は、センターという組織資源を120%活用して「教育の諸課題に係る研究及び実践」を推進する所存です。

学校と大学をつなぐ「教育フォーラム2024」

「これからの学校教育のかたちと学びのすがたを探る」

センター客員教授 久 保 雅 則

11月23日に、9回目を迎える「教育フォーラム2024」を開催しました。これは、学校と大学が連携して、教育実践と教育研究の融合を図るとともに、教師と研究者による協同の学びを推進する目的で、年に一回開催しています。

今年は、個別教育を進めるオランダのイエナプラン教育について学ぶ地域の人々の取り組みや自己調整学習に取り組む教育実践をもとに、教育とは誰のために、何のためにあるのかを考えながら、これからの学校教育のかたちや子供たちの学びのすがた、授業の在り方について、グループ協議も含めながら考えを深めていきました。



オンライン参加も含めて、50名の先生方、学生、教職大学院生、大学教員、教育機関等の方々の参加で、様々な立場から「学校の未来とこれからの学び」について学び合い話し合いながら考える機会となりました。

〈主な内容〉

1 講 演 等 「小学校の統廃合問題とイエナプラン勉強会の歩み」

「船峯イエナプラン勉強会」のみなさん

2 実 践 発 表 「小学校における自己調整学習の実践例とそこでの子どもたちの学びの姿」

射水市立片口小学校 教諭 福田慎一郎 先生

3 グループ協議 「これからの学校教育のかたちや子供たちの学びのすがた」

〈参加者の感想の一部〉

- 船峯小学校をはじめとする地域住民の方々の努力を知ることができてとても感動しました。子供の教育をさらによいものにしようという、教師以外からの声を知ることができて教育現場に希望をもつことができました。
- イエナプランや自己調整学習について学び、改めて今求められる教育とは何か、個別最適、協働的な学びについて考えることができた。特に、今不登校が増えている中で、本当に学校がどうあるべきか、子供たちの幸せを実現していくために何が必要か考え続けたいを思った。
- 地域という新しい視点で話が聞けて新鮮だった。ビジョンは学校だけでなく、地域も共有しないといけないという考え方はコミュニティスクールからも感じていたが、地域からビジョンを示すという新しい実践は良かった。
- AARIは自分の実践に近いものであったので参考になった。自分になかったところもたくさんあってよかった。今後の実践に向けて具体的なイメージをもてたので3学期から実行していきたい。
- 2つの発表を聞いて、地域と学校のつながりの大切さや教師のマインドセットの困難さに強く共感しました。また、いろんな視点からの話が聞けて、自分の視野を広げるよい機会になりました。また、このような機会があれば参加したいです。

今、社会は多様化し、変化が激しく複雑化し、将来の予測が困難な時代になってきています。このような時代を乗り切るための力は、これまでの画一的な一斉授業から脱皮し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」など「個別教育」への転換が行われて、子供たちの身に付いていくと思います。しかし、現実には受験優先の社会構造が依然としてあり、個別教育の進展を阻んでいるように思います。それを改革し、国を支える子供たち一人一人のための教育が行われるように教育行政の本気の改革が今後望まれます。

今年も、発表者の熱意や参加者の積極的なグループ協議などで充実した研修会になりました。閉会後も多くの参加者が残って話し合いをしている姿がとても印象的でした。

体験を通して学び合う

センター客員教授 宝 田 幸 嗣

内地留学は、教育臨床に関わる理論や手法を学び教員としてステップアップできるだけでなく、リフレッシュして、気持ちも新たに児童生徒と向き合うきっかけにもなります。担当する授業（水曜日の午後、前期・後期各18回）では、仲間との交流を通して心理解放を促進するとともに、学んだことが日々の実践につながるよう、体験を通した学び合いや振り返りを大切に、その有用性を実感できるようにしています。今年度は、前期4名（中学校3、高校1）、後期5名（小学校3、中学校2）の方に受講していただきました。授業は、次のような内容で構成しています。

1 ウォーミングアップ

授業の冒頭部分は、プレイルーム内にある遊具で遊んだり、卓球をしたりして仲間と交流します。楽しい時間を共有する中で、関係性の深まりを実感し、心を開いて活動に取り組めるようになることをねらいとしています。

2 学外研修

呉羽青少年自然の家でグランドゴルフ等に興じたり、匠の里において陶芸に没頭したりする機会を持ちます。教員としての役割を外し、普段とは違う環境で仲間と交流したり、自分自身と向き合ったりすることを通して、他者理解と自己理解を深めます。

3 人間関係づくりの手法

構成的グループ・エンカウンターやグループワーク・トレーニング、ソーシャルスキル・トレーニング等、児童生徒の人間関係づくりの手法を仲間との演習を通して体験的に学びます。学校で活用することを想定して、効果的な実施時期や場面、求められる工夫や配慮等について話し合います。

4 学校における教育相談の進め方

面接・面談の進め方やカウンセリングの技法等について学んだ後、研修生が過去に経験したケースのロールプレイを通して、児童生徒や保護者との面接、及び同僚へのコンサルテーションの在り方についてそのポイントを話し合います。

5 気になる児童生徒への対応

不登校やいじめ等の現状を踏まえ、求められる指導・支援の在り方について意見交換します。また、発達障害等の気になる児童生徒について、研修生が過去に関わったケースを基に理解を深め、効果的な支援の在り方を話し合います。



ただ今、没頭中（匠の里）



モルックを楽しむ（呉羽青少年自然の家）

附属幼稚園から

附属幼稚園 陽 弥生

本園では今年度より、「主体的な子供の活動を支える教師の役割」という研究主題で研究を進めています。子供へのよりよい援助について考える上で、目の前の子供の姿を瞬時に、そして的確に捉えることが大切であると考え、一年次である今年度は、「子供の姿を捉える」と副題を設けました。そして、「興味や関心」「意欲的な態度」「行き詰まり」の3つの観点から子供の姿を捉えてきました。

6月21日（金）に保育フォーラムを開催し、保育で見られた主体的な子供の姿について参加者のみなさんと語り合いました。それぞれの捉えを共有したことで、経緯や背景も踏まえて子供の姿を捉え直し、子供への理解が深まりました。講演会には東京家政大学 教授 戸田雅美先生をお招きしました。県内外から多くの方に参加していただき、共に学ぶ機会をもつことができました。

また、学年や公開園内研修会参観者による保育カンファレンスを継続的に行い、子供の「興味や関心」「意欲的な態度」「行き詰まり」といった様相が遊びを進めていく中でどのように表れるのかを研究しました。特に、子供はどのようなことに「行き詰まり」を感じているのか、どのように行き詰まりを乗り越えているのかということを探りながら、主体的な子供の活動を支える教師の役割について考えました。

今年度の研究の成果は令和7年6月20日（金）に開催する保育フォーラムにおいて報告いたします。二年次の研究では、今年度の研究を踏まえ、教師の援助に焦点を当て、研究を進めていきます。今後も附属幼稚園の研究にご指導とご協力をお願いいたします。

附属小学校から

附属小学校 研究部長 神田 靖大

本校では、令和2年度より「学び続ける子供が育つ授業の創造—対話に着目して—」を研究主題に掲げ、4年計画で研究を進めてきました。令和6年度は、対話に着目して研究してきたことを、「対話が学び続ける子供を育てる」の成果物にまとめました。これもひとえに皆様のご支援とご協力のおかげであり、心より感謝申し上げます。

学び続ける子供を育てていく上で重要となる教師の役割には、①日常的に対話の場を適切に設定すること、②子供を認め、委ねる場面では委ね、学びの過程や結果における子供の行為や姿を再び認めること、③子供が自ら学びに向かうための学習環境をつくり、機能させること、④対話自体が価値あるものであると、子供が自覚できるようにすること等があると分かりました。

本校の研究には、「教師は41人目の対話者であれ」という言葉があります。当時はまだ40人学級であったため、そう表現されています。この言葉は、「主体的・対話的で深い学び」や、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」等における、教師の役割を示しているように感じます。これからの教師は、子供がつくる学びを支えるだけでなく、伴走者となって共に学びをつくったり、学習環境の一部となったりするなど、しなやかに役割を変えながら振る舞うことができなければなりません。そのような教師のもとで、子供もまたしなやかに、これからの時代を学び続けていくための土台を築いていくことができるのだと思います。

令和7年度は、新たな研究主題を掲げ、研究を進めていきます。これまでの研究を大切にしながら、これからの学校教育の在り方について、本校の考えをお示ししたいと考えております。今後とも、附属小学校の研究にご指導とご協力をよろしくお願いいたします。

附属中学校から

附属中学校 本江 信一郎

本校では研究主題「主体性の高まりをめざす課題学習」のもと、令和2年度から5年間「『見方・考え方』を働かせ、『深い学び』を実現する授業づくり」を副題に掲げ、以下の2点を重点にして研究を進めてきました。

- ①「深い学び」を実現する単元構成
- ②「見方・考え方」を働かせる「問い」

授業や校内研修を通して「深い学び」を単なる知識及び技能の習得に留まらず、それらを生かす過程で思考力、判断力、表現力等が育まれ、課題の追究・解決へと向かわせるような単元構成の在り方の研究と、実践を重ねることができました。そして、授業実践の中で「見方・考え方」を働かせる「問い」が何か、どのような場面で問うことがより効果的なのかを解明することができました。さらに、どのような場面で問うかを考えることは単元構成を考えることに通じ、二つの重点は互いに関連し合っていることも分かってきました。

また、この5年間でGIGAスクール構想が加速し、1人1台端末の配備が早急に行われました。その結果、端末を用いた見取りや学習履歴の蓄積をはじめ、プリテストとポストテストによる生徒の変容の捉え、妥当性を担保するためのルーブリックを用いた評価の在り方等、指導に対する評価に関しても様々な成果を得ることができました。

来年度の教育研究協議会（6月6日）では、5年間の研究内容をまとめた成果を報告します。また、講師に独立行政法人教職員支援機構理事長 荒瀬克己先生をお招きして講演を予定しております。多くの先生方にご参会いただき、ご意見やご助言をいただきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

附属特別支援学校から

附属特別支援学校 北村 満

本校では、研究テーマを「ウェルビーイングを実現する学校づくり」と設定し、3年計画の初年度がスタートしました。文部科学省は、令和5年に閣議決定された教育振興基本計画の中で、二つのコンセプトを提示し、日本発日本社会に根差したウェルビーイングの向上が明記され、ウェルビーイングはこれからの社会を生きる児童生徒や教師にとって重要なキーワードの一つとなっています。そこで、本校では、教育振興基本計画で示された16個の目標から本校の現状を鑑み、目標3「健やかな体の育成・スポーツを通じた豊かな心身の育成」、目標11「デジタル人材の育成・教育DXの推進」、目標12「指導体制・ICT環境整備」の三つを選び研究するそれぞれの目標部会を設定し、ウェルビーイングの実現を目指した実践研究を進めてきました。

目標3の部会では、食に関する指導や豊かな心身の育成に向けた支援についての実践研究を外務専門家と連携して行いました。目標11の部会では、デジタル・シティズンシップ教育における6領域をどの教科や単元で学習するのかを年間指導計画に組み込んだり、外部専門家と連携して生成AIを活用した授業について研究をしたりしました。目標12の部会では、学部間の系統性を大切にした生活単元学習の学習内容表を作成したり、学校教育目標や目指す姿、学習指導要領の目標から系統性を見直した国語・算数（数学）の重点的に行う学習目標内容表の作成をしたりしました。

今年度の研究成果については、12月の公開教育研究会にてポスター発表の形式で行いました。県内外から約30名の参加がありました。

来年度は、2年次として更なる研究実践を進め、公開教育研究会で発表させていただきます。今後とも、附属特別支援学校の研究にご指導とご協力をお願いいたします。

活動報告

学習環境研究部門

センター教授 長谷川 春生

学習環境研究部門では、本年度も、富山大学ICT・DS教育支援事業の1つであるオンラインセミナーの運営を行いました。第1回目は、6月26日（水）に、射水市立片口小学校教諭の福田慎一郎氏より、「小学校における自己調整学習の実践例とそこでの子どもたちの学びの姿」というテーマで講演をしていただきました。第2回目は、11月14日（木）に、東京都渋谷区神南小学校主幹教諭の鍋谷正尉氏より、「渋谷区の探究『シブヤ未来科』の取組とICTの活用」というテーマで講演をしていただきました。第3回目は、2月27日（木）に、札幌国際大学基盤教育部准教授の安井政樹氏より、「これからのAI時代と教育」というテーマで講演をしていただきました。どの回も16:00～16:45という短い時間に、重要なポイントを分かりやすくお話しいただき、大きな学びがありました。また、参加申込者に対しては、YouTube限定公開による見逃し配信も実施し、たくさんの方々から視聴していただくことができました。

学習環境研究部門の長谷川研究室では、5月から7月の3か月間、氷見市立十三中学校の田中裕子先生、10月から12月の3か月間、入善町立上青小学校の古田仁史先生、上市町立陽南小学校の野村信介先生が、内地留学生として研修をされました。田中先生の研究テーマは「生徒の『ワクワク』を大切にした中学校数学教育の在り方ー中学校数学におけるSTEAM教育と自己調整学習ー」、古田先生の研究テーマは「タコラッチとStretch 3を使ったプログラミング学習」、野村先生の研究テーマは「1人1台端末を活用した主体的な家庭学習」でした。研修の成果は、第46回北陸三県教育工学研究大会（富山大会）で発表を行い、それぞれの研修成果を広めることができました。

教育臨床研究部門

センター教授 石津 憲一郎

センター准教授 近藤 龍彰

教育臨床部門では、現在2名体制で部門運営を行っています。今年度も例年通り、富山県教育委員会との共同事業、各県内の教育センターから派遣される内地留学の先生の受け入れを行いました。R6年度は前期・後期合わせて9名の先生方が研修を行いました。研修のテーマとしては「子どもの自律性」や「組織としての学校教育相談体制」などがありましたが、いずれもこれまでの教育経験を振り返るとともに、現場に活用できる知見や視点を修得していったものと思われます。本事業の一部は教員カウンセラー（富山県カウンセリング指導員）育成事業の一環として行われており、現場への臨床心理的知識の普及に貢献しています。

今年度はまた、教育臨床部門研修会をオンラインで開催しました。2024年11月29日（金）に、早稲田大学の桂川泰典先生に、「あらためて保護者対応を考えるーいじめ問題を複雑化させないためにー」をテーマに、ご講演いただきました。当日は現職の先生を含め約50名の参加者し、複雑化する保護者対応のポイントについて、理論的にも実践的にも深く学ぶ機会となりました。

小規模なものとしては、「教育臨床研究会」および「教育心理学勉強会」を開催しました。今年度は3回開催された「教育臨床研究会」では、過去の内地留学生と教職大学院の「学びの継続の一環」をテーマに、約25名程度の参加者の中で理論と実践の往還を続けています（今年度はすべてハイブリッド開催として行いました）。「教育心理学勉強会」では、現職の先生方と学生が10名程度集まり（Zoom等を活用）、教育心理学関連の知見について学び合いました。今年度は、森口祐介（著）『10代の脳とうまくつきあう 非認知能力の大事な役割』（2024年5月11日）、竹内譲彰（著）『主体的な学びの探求』（2024年7月20日）、河村暁（著）『理論に基づいた「学習」を目指して…教室の中のワーキングメモリ 弱さのある子に配慮した支援』（2024年10月19日）、山本博樹（編著）『教師のための説明実践の心理学』（2024年12月14日）、今井むつみ（著）『学力崩壊 - 認知科学による回復の道筋』（2025年2月22日）といった書籍を取り上げて、参加者で議論しました。

『理論に基づいた「学習」を目指して…教室の中のワーキングメモリ 弱さのある子に配慮した支援』（2024年10月19日）、山本博樹（編著）『教師のための説明実践の心理学』（2024年12月14日）、今井むつみ（著）『学力崩壊 - 認知科学による回復の道筋』（2025年2月22日）といった書籍を取り上げて、参加者で議論しました。今後も地域の教育現場に対して有益な情報発信を続けていきたいと思っています。

教育工学研究部門

センター講師 小澤 郁美

教育工学部門では、「主体的・対話的で深い学び」や「個別最適化学習」の実現に向けた活動を実施しています。2024年度は、①研究会の実施、②研究会の公開講座、③学習支援事業、④教育者向けの講演、⑤富山刑務所での指導助言を行いました。

研究会では、現在の教育における諸問題の解決に向け、学校と大学との連携による教育実践と教育研究の融合を図った研究会（明日の学校を創る研究会）を定期的に行っています。本年度は、「いじめ」「生成AIと教育」など様々なテーマのもと、参加者で討議を行いました。また、研究会の公開講座として「学校と大学のコラボレーション 教育フォーラム2024」を11月23日（土）に実施いたしました。

学習支援事業では、認知カウンセリング（認知心理学の知見を活かした個別学習指導）の技法や、ワーキングメモリ理論（一時的に情報を覚えながら処理することにかかわる記憶機能であり、学習と関連）を活かした個別学習支援を実施しています。本年度は、地域の小学生数名を対象に保護者や学校と連携しながら国語や算数の学習改善を目指した個別学習支援を行いました。

地域貢献活動として、学校心理学研究会やS.E.N.Sの会、県内の小学校や支援学校で学校教育や特別支援に携わる教育者向けの講演を実施いたしました。講演では、主にワーキングメモリが小さいお子さんの学校生活における特徴や支援についてお話ししました。講演を通じて小学校との連携も進んでおり、今後は児童のワーキングメモリのアセスメントと、特性に合わせた指導の提案をする予定です。また、富山刑務所との連携事業として、窃盗防止プログラムへの指導助言を行いました。認知カウンセリングの技法を活かしたプログラムを作成・実施いただいております。

今後もこれらの活動を継続し、地域の教育改善の一助となるよう努めてまいります。

環境教育部門

センター教授 高橋 満彦

研究協力員 増山 照夫

令和6年度は、改組された教育学部も3年目に入り、かつ、栽培活動等の活動拠点も、寺町の自然観察実習センターに移って3年目となり、学部も当部門もそれなりの落ち着きを見せてきた。

学部の実習関係では、人間発達科学部の栽培技術実習は履修者が減ってしまったが、教育学部の実習は、生活科の授業を学年進行の関係で今年から開始することとなり、履修者も多く、新たなカリキュラムへの対応に忙しかった。生活科の授業では、春一番に寺町農場でジャガイモの栽培を始めたばかりでなく、学部中庭で学生が持ち寄った野菜を栽培することとなった。学部の中庭を畑に替えるというのは、戦時下のような話だが、ことのほか愉快で学生も楽しく学んだようである。

また、幼稚園のサツマイモ栽培も本年も盛況のうちに実施できた。今年は生活科の授業と連携して学生の参加があり、教育的に良い取組であったが、予定の調整には課題がある。このほか、家庭科実習等の材料ともなる野菜類の栽培を実施した。

いずれにしても、施設は老朽化が目立ち、管理のための人的資源も外部委託であり、ボランティアの御奉仕にも頼っているが、いずれも予算が足りていないので、予算獲得が課題である。

研究活動は、令和4年度から科研費基盤研究B（「鳥獣保護管理の現代的課題に適応した人と場の制度再構築：全国の猟師達と考える処方箋」代表者高橋満彦）を実施しており、本年度は論文や国際学会での発表を行った。また、昨年度から、音楽の増田建太講師の協力を得て、開進堂楽器との共同研究「子供を対象にした創造的な音楽実践の検討」を実施し、本年度は児童対象の創造音楽イベントを実施したが、現代音楽を想像するというイベントは、全国的にもまれな前衛的取り組みである。そして何より、子供たちが喜んでいたのが収穫であった。

内地留学を振り返って

射水市立小杉南中学校 寺西 潤子

内地留学での経験は、自分が知らなかったことを学び、自分の浅い知識で分かったつもりになっていたことを学び直すよい機会になりました。大学では、経験年数、校種、働いている地域等が異なる多くの先生方との出会いがあり、意見交換を通して気付けたことが多々あります。その中でも「学校の当たり前は、当たり前ではない」ということに気付かされました。教師としての支援の在り方だけでなく、学校としての支援の在り方についてもじっくりと考え、内地留学生同士で議論したことは、現場に戻ってから困り感を抱えている生徒たちに接する際に大きく役立ちました。今後も、一人一人のリソースをきちんと把握し、本当の意味で生徒に寄り添える教師であることを心がけていきたいです。

富山市立堀川中学校 榎本 友香里

この内地留学の半年間は、これまでの自分の教員生活での実践を振り返り、至らなかった点に気づき、反省することも多かったのですが、同時に、新しいことを学ぶ楽しさ、今までの経験や知識と新たな知見が結び付き、より深い学びへとつながっていく面白さを実感しました。子どもたちにも、そのような知識と経験が結び付く面白さを味わうことができるような学びの場を提供したいと思いました。また、石津先生や同期内地留学生との関わり合いの中で、チームワークの大切さも実感しました。一人一人に丁寧に寄り添い、相手のことを理解しようとする心を常にもちながら、一人一人が大切にされる学校にするために自分にできることは何かを考え、実践していきたいと思います。

立山町立雄山中学校 中谷 嘉子

内地留学は、出逢いの連続であり、出逢いが多くの学びをもたらしてくれました。教師としてだけではなく、一人の人間としての学びでもありました。また、大学の授業やゼミを通して学ぶ楽しさを改めて実感しました。同時に、いかに教育に関する理論を知らなかったかも痛感しました。理論を実践することは難しいですが、理論の土台があるから広い視野をもつことができます。石津先生は、授業の中でカウンセリングを“相手の眼鏡をかけさせてもらう”と表現されていました。この言葉が表している温かさや謙虚さをもち、生徒達と向き合っていきたいです。「ひとつひとつの木を大切にすることこそ豊かな森が育つ」学校をそんな場所にしていきたいです。

富山県立となみ野高等学校 犬田 幸雄

内地留学では、学校心理学の諸理論に関する講義やゼミ等を通して、生徒理解のあり方や、チーム支援に必要な考え方、組織のあり方等について、深く学ぶことができました。多様な困難を抱える生徒に対して教育相談の分野が果たす役割は何か、組織として教育相談体制を定着させるにはどうすれば良いのか、チームが本当の意味でのチームとして機能するために必要な条件とは何かということについて研究することができました。今後は、現場での実践を通して教育相談についての専門性をより高めるとともに、生徒も教職員も自分らしく生き生きと過ごすために、学習環境・職場環境において心理的安全性が確保できるような人間関係や組織づくりを意識していきたいと思います。



報 告

第105回国立大学実践研究関連センター協議会報告

令和6年8月30日（金）に、Zoomにて、第105回国立大学実践研究関連センター協議会が開催された。残念ながら富山大学からは参加することはできなかったが、定期的な参加を継続していきたい。

第106回国立大学実践研究関連センター協議会報告

高橋 満彦

令和7年2月21日（金）に、東京学芸大学にて、第106回国立大学実践研究関連センター協議会が開催された。富山大学からは高橋満彦センター長が参加し、各センターとの情報共有を行った。

次年度より、協議会として、教員志望率向上に向けての研究を行うこととなった。

業 務 報 告

センター日誌 令和6年度の実践総合センターの主な行事

令和6年（2024）

- 6月26日 第1回センター運営委員会・第1回センター紀要編集委員会
- 8月7～9日 第2回センター紀要編集委員会（メール審議）
- 8月30日 第105回国立大学教育実践研究関連センター協議会（Zoom）
- 9月4日 第3回センター紀要編集委員会
- 11月6日 第4回センター紀要編集委員会
- 11月23日 教育フォーラム2024 学校と大学のコラボレーション
- 11月29日 教育臨床研究部門研修会 教育臨床講演会 あらためて保護者対応を考える
一いじめ問題を複雑化させないために一

令和7年（2025）

- 2月21日 第106回国立大学教育実践関連センター協議会（東京学芸大学）
-

編 集 後 記

今年度も多くの方々のご協力によりセンターニュース第45号をお届けできることとなりました。

子どもや学校現場を取り巻く環境はますます厳しさを増しているように感じられます。その中において教育現場において子どもたちや保護者を支える実践者の方々に、少しでも力になれるようなサポート、発信をしていくことは、センターの重要な役割です。今後もこの機能をさらに充実・発展させていきたいと思いますので、引き続きのご協力とご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

印 刷 令和7年3月11日

発 行 令和7年3月15日

編集発行 富山大学教育学部附属教育研究実践総合センター

代表者 高橋 満彦

〒930-8555 富山市五福3190 ☎076-445-6380